

- ・アカゲザルにおけるネオンカラー効果と運動からの形の知覚の認知とその脳内機構

長田佳久・長坂泰勇（立教大・文）

（文責：三上章允）

類人猿の認知行動発達の比較研究

（実施年度：平成 10～12 年度）

（推進者：松沢哲郎・友永雅己・小嶋祥三・濱田 稔・田中正之）

類人猿の認知と行動ならびにその発達的变化に焦点をあてた研究をおこなった。チンパンジーが主要な研究対象であるが、ニホンザルやテナガザルとの比較、ヒトの自閉症児との比較研究などを含んでいる。それぞれの年度において、以下のような個別の研究テーマについて共同研究をおこなった。とくに平成 12 年度には、チンパンジー 3 個体が（4 月にアイがアユムを、6 月にクロエがクレオを、8 月にバンがバルを）出産し、多くの共同研究が実施された。本研究所が有する一群 14 個体（0 歳から 36 歳まで）のチンパンジーについて、さまざまな角度から研究をおこなった。

コンピュータに 1 個体が向かう場面では、系列項目の記憶や、ビデオ動画の認識を研究した。動画の記憶においても、離散的なリスト項目の記憶と同様に「親近性効果 (recency effect)」のあることがわかった。自由な遊び場面での研究もおこなった。これまで、チンパンジーを対象とした描画や粘土造形の研究はあったが、砂を素材とした遊びの研究はなかった。系統だっておこなわれてこなかった「遊び」の研究が、与える素材をくふうしたり、複数個体のいる社会的な場面で研究され始めたといえる。

ヒトの子どもで使われる研究パラダイム、たとえば「選好注視法」など、をヒト以外の霊長類の乳幼児に適応した研究をおこなった。その結果、ヒトの資料と直接比較しうる資料を得て、主に視覚・視認知の発達的变化の霊長類的基盤が明らかになりつつある。とくに、チンパンジーの新生児における新生児微笑や新生児模倣の存在、さらにはチンパンジーが生後 1 ヶ月ころに、母親の顔を好むようになるなど、新しい発見があった。視覚以外にも、聴覚や味覚や嗅覚の発達においても資料をえることができた。また、ヒトの乳児で最近注目されている「ジェネラル・ムーブメント (GM)」についても、ヒト、チンパンジー、テナガザル、ニホンザルで比較研究をおこなった。

（平成 10 年度）

- ・箱庭作成法を用いたチンパンジーのパーソナリティー分析の可能性

武田庄平・早川東作（東京農工大・農）

- ・霊長類における自然法則の認識とその発達

藤田和生（京都大・文）

（平成 11 年度）

- ・チンパンジーにおける Sand Manipulation の分析

武田庄平（東京農工大・農）

- ・霊長類における自然法則の認識とその発達

藤田和生（京大・文）

- ・チンパンジーにおけるシンボル操作の発達：推移的推論について

森村成樹・不破紅樹・伊谷原一（林原自然科学博物館）

（平成 12 年度）

- ・チンパンジーの砂遊びにおける象徴的操作の実験的分析

武田庄平（東京農工大・農）

- ・チンパンジーとヒト幼児（健常児・自閉症児）の空間認知に関する比較・発達の研究

筒井紀久子（東京農工大・農）

- ・チンパンジーの子供の遊びの発達：ひとり遊びと社会的遊びの発達

関根すみれな（滋賀県立大・人間文化）

- ・注視時間課題をもちいた霊長類の認知発達の比較研究

橋彌和秀（東京大・医）

- ・霊長類の乳児における顔図形認識

桑畑裕子（京大・文）

- ・霊長類新生児の自発運動（General movements）の発達

小西行郎（埼玉医科大）・竹下秀子（滋賀県立大）・多賀徹太郎（東京大）

堀本直幹（九州大・医）・竹内恵子（福井大）・高谷理恵子（福島大）

- ・チンパンジーにおける動画見本合わせ課題を用いた記憶に関する研究

森村成樹・不破紅樹・伊谷原一（林原自然科学博物館）

（文責：松沢哲郎）

3. 共同利用研究会

「環境化学物質の生体蓄積と霊長類の応答」

日 時：2000 年 5 月 12 日（金）～13 日（土）

場 所：京都大学霊長類研究所 1 階大会議室

参加者：約 50 名

プログラム

2000 年 5 月 12 日（金）

はじめに（開会）浅岡一雄（京大・霊長研）

座長 景山 節（京大・霊長研）

坪田敏男（岐阜大・農・獣医）「環境ホルモンによる野生動物への影響」

矢野一行（埼玉医大・化学）

「フタル酸エステルのわが国の環境中での分布とその内分泌攪乱作用」